

- お口の準備体操
くち お口の準備体操
じゅんぴたいそう
- リズムに乗って
の
- テンポよく漢文
かんぶん
- 声に出そう古典
こえ 声に出そう古典
だ こてん
- 読もう文豪作品
よ 読もう文豪作品
ぶんごうさくひん
- なりきって読もう
よ
- 詩を楽しもう
し 詩を楽しもう
たの
- 順序よく
じゅんじよ

『五十音』

ごじゅうおん

①

北原白秋
きたはらはくしゅう

水馬あめんぼ 赤あかいな アイウエオ

浮藻うきもに 小蝦こえびも およいでる

柿かきの木き 栗くりの木き カキクケコ

啄木鳥きつつき こつつこつ 枯かれけやき

大角豆おさげに 酢すをかけ サシスセソ

その魚うお 浅瀬あさせで 刺さしました

立ちまたしよ 喇叭らっぱで タチツテト

トテトテタツタと 飛とび立たった

蛞蝓なめくじ のろのろ ナニヌネノ

納戸なんどに ぬめって なにねばる

『五十音』

ごじゅうおん

②

鳩はとぽっぽ ほろほろ ハヒフへホ

日向ひなたの お部屋へやにや 笛ふえを吹ふく

蝸牛まいまい 螺旋卷ねじまき マミムメモ

梅うめの実み 落おちても 見みもしまい

焼栗やきぐり ゆで栗ぐり ヤイユエヨ

山田やまだに 灯ひのつく 宵よいの家いえ

雷鳥らいちょうは 寒さむかる ラリルレロ

蓮花れんげが 咲さいたら 瑠璃るりの鳥とり

わいわいわっしよい ワヰウエヲ

植木屋うゑき 井戸ゐど換がえ お祭まつりだ

『早口言葉メドレー』

はやくちことば

① ♪

バス瓦斯爆発

がすばくはつ

鱈の隣に鱈場蟹

たらとなりたらばがに

東京特許許可局

とうきょうとっきょきょかきょく

第五交響曲に観客驚愕

だいにこうきょうきょくかんきゃくきょうがく

蝶蝶ちよつと採って頂戴

ちようちようちよとちようだい

バナナの謎はまだ謎なのだ

ばななのなぞはまだなぞ

魔術師が派出所で摘出手術

まじゆつしはしゆつじよてきしゆつしゆじゆつ

新人歌手新春シャンソンショー

しんじんかしゆしんしゆん

フルーツジュース抽出中

ちゆうしゆつちゆう

『早口言葉メドレー』

はやくちことば

② ♪

右耳2ミリ右にミニ右耳

みぎみみみぎ

庭には二羽、鶏がいる

にわにわにわとり

大羞恥心、中羞恥心、小羞恥心

だいしゆうちしんちゆうしゆうちしんしゆうしゆうちしん

李も桃も桃のうち、

すもももももも

桃も李も桃のうち

ももすもももも

飯事した儘、

ままごと

儘よと誤魔化すママっ子

ままごともまか

笑わば笑え、

わらわら

妾は笑われる謂われはないわ

わらわらわらわら

お綾や親にお謝り

あやあや

お綾や八百屋にお謝りとお言い

あやあやおやおあ

『早口言葉メドレー』③ 音楽

引きにくい釘、抜きにくい釘、
引き抜きにくい釘

親亀の上に子亀、子亀の上に孫亀、
孫亀の上に曾孫亀

豚が豚をぶったので、
ぶたれた豚がぶった豚をぶった

坊主が屏風に
上手に坊主の絵を描いた

鹿も麩鹿も鹿だが
しかし確か葦鹿は鹿ではない

『早口言葉メドレー』④ 音楽

月々に月見る月は多けれど、
月見る月はこの月の月

桜咲く、桜の山の桜花、
咲く桜あり、散る桜あり

向こうの竹垣になぜ竹立て掛けた？
竹立て掛けたか
竹立て掛けた

浅草寺の千手観音
専念千日千遍拜んで
千束町で煎餅買って千食べた

『以呂波有多』①

弘法大師 空海
こうぼうたいし くうかい

いろははうた

以呂波耳本へ止
いろはにほへと

千利奴流乎
ちりぬるを

和加余多連會
わかかよたれそ

津称那良牟
つねならむ

有為能於久耶万
うゐ(うい)ののおくやま

計不己衣天
けふこえて

阿佐伎喻女美之
あさきゆめみし

惠比毛勢須
ゑ(うえ)ひもせす

『いろはに金平糖』

こんぺいとう

いろはに金平糖
いろはにこんぺいとう

金平糖は甘い
こんぺいとうあま

甘いはお砂糖
あまおさとう

お砂糖は白い
おさとうしろ

白いは兔
しろうさぎ

兔は跳ねる
うさぎはうねる

跳ねるは蛙
うねるはかえる

蛙は青い
かえるあお

青いはお化け
あおお化け

お化けは消える
お化けは消える

消えるは電気
消えるは電気

電気は光る
電気は光る

光るは親父の禿げ頭
ひかおやじのあたま

『数かぞえ歌』
かず うた

- 一 無花果 いちじく
- 二 人参 にんじん
- 三 山椒 さんしよ
- 四 椎茸 しいたけ
- 五 牛蒡 ごぼう
- 六 無串子 むくろじゆ
- 七 七草 ななくさ
- 八 初茸 はつたけ
- 九 胡瓜 きゆうり
- 十 冬瓜 とうがん

『付け足し言葉』
つ た ことば

- 驚き桃の木 山椒の木 おどろ もも きさんしよ
- あたりき車力よ車引き しやりき くるまひ
- 蟻が鯛なら芋虫や鯨 あり たい いもむし くじら
- 嘘を築地の御門跡 うそ つきじ ごもんぜき
- 恐れ入谷の鬼子母神 おそ いらや きしもじん
- おっと合点承知之助 がってんしやうちのすけ
- その手は桑名の焼蛤 て くわな やきはまぐり
- 何か用か九日十日 なに よう ここのかとおか
- 何かなんきん唐茄子かぼちや なに とうなす

『寿限無』

じゅげむ

寿限無 寿限無
じゅげむ じゅげむ

五劫の擦り切れ
ごこう すき

海砂利水魚の
かいじやりすいぎよ

水行末 雲来末 風来末
すいぎようまつ うんらいまつ ふうらいまつ

食う寝る処に住む処
くね とこら す とこら

藪柑子のぶら小路
やぶからいこうじ

パイポパイポパイポの

シューリングガン シューリングガンの

グリーンダイ グリーンダイの

ポンポコピーの ポンポコナーの

長久命の長助
ちよききむめい ちよすけ

『重言』

じゅうげん

いにしえの

昔の武士の侍が
むかし ぶし さむらい

山の中の山中で
やま なか さんちゆう

馬から落ちて落馬して
うま おお ちやくば

女の婦人に笑われて
おんな ぶん わら

赤い顔して赤面し
あか かお せきめん

家に帰って帰宅して
いえ かえ きたく

仏の前の仏前で
ほとけ まえ ぶつぜん

短い刀の短刀で
みじか なた たんとう

腹を切って切腹した
はら き せつぶく

『山のあなた』

やま

カール・ブツセ

上田 敏 訳
うえだ びん やく

山のあなたの空遠く

やま そらとお

「幸」住むと人のいふ。

さいわい す ひと う

噫、われひと、尋めゆきて

ああ と と

涙さしぐみ、かへりきぬ。

なみだ え

山のあなたになほ遠く

やま おとお

「幸」住むと人のいふ。

さいわい す ひと う

『初恋』

はつこい

①

島崎 藤村
しまざき とうそん

まだあげ初めし前髪の

まだあげ そ まえがみ

林檎のもとに見えしとき

りんご み

前にさしたる花櫛の

まえ はなぐし

花ある君と思ひけり

はな きみ い

やさしく白き手をのべて

しろく て

林檎をわれにあたへしは

りんご え

薄紅の秋の実に

うすくれない あき み

人こひ初めしはじめなり

ひと い そ

『汚れつちまつた悲しみに……』①

中原中也
なかはらちゅうや

汚れつちまつた悲しみに

今日も小雪の降りかかる

汚れつちまつた悲しみに

今日も風さえ吹きすぎる

汚れつちまつた悲しみに

たとえば狐の革裘

汚れつちまつた悲しみに

小雪のかかつてちぢこまる

『サーカス』①

中原中也
なかはらちゅうや

幾時代かがありまして

茶色い戦争ありました

幾時代かがありまして

冬は疾風吹きました

幾時代かがありまして

今夜此処での一と殷盛り

今夜此処での一と殷盛り

サーカス小屋は高い梁

そこに一つのブランコだ

見えるともないブランコだ

『梁塵秘抄』

りょうじん ひしやう

①

後白河法皇
ごしらかわほうおう

へん編

遊びをせんとや生れけむ、
あそ うま ん

戯れせんとや生れけん、
たわぶ むま

遊ぶ子供の声きけば、
あそ こども こえ

わが身さへこそ動がるれ
み え ゆる

『太平記』

たいへいき

①

小島法師
こじまほうし

落花の雪に踏み迷ふ、
らつか ゆき ふ まよう

交野の春の桜狩り、
かたの はる さくらが

紅葉の錦を衣て帰る、
もみじ にしき き かえ

嵐の山の秋の暮。
あらし やま あき くれ

『曾根崎心中』①

近松門左衛門
ちかまつもんざえもん

この世の名残り、夜も名残り。

死に行く身をたとふれば

あだしが原の道の霜。

一足づゝに消えて行く

夢の夢こそ哀れなれ。

『弁天娘女男白浪』①

（白浪五人男）
べんてんむすめ おのしらなみ
しらなみごにんおとこ
河竹黙阿弥
かわたけもくあみ

知らざあ言つて聞かせやしよう。

浜の真砂と五右衛門が、

歌に残せし盗人の、

種は尽きねえ七里ヶ浜、

その白浪の夜働き、

以前をいやあ江の島で、

年季勤めの児ヶ淵。

百味講で散す蒔錢を、

当てに小皿の一文子、

百が二百と賽銭の、

くすね錢せえだんだんに。

『落葉松』①

か
ら
まつ

一

北原白秋
きたはらはくしゅう

からまつの林を過ぎて

はやし
す

からまつをしみじみと見き。

み

からまつはさびしかりけり。

たびゆくはさびしかりけり。

二

からまつの林を出でて、

はやし
い

からまつの林に入りぬ。

はやし
い

からまつの林に入りて、

はやし
い

また細く道はつづけり。

ほそ
みち

『落葉』

らくよう

①

ヴェルレーヌ

上田敏訳
うえだ びん やく

秋の日の

あき ひ

ギオロンの

ヴィ

ためいきの

身にしみて

み

ひたぶるに

うら悲し。

かな

『雨ニモマケズ』①

宮沢賢治
みやざわけんじ

雨にも負けず
あめ ま

風にも負けず
かぜ ま

雪にも夏の暑さにも負けぬ
ゆき なつ あつ ま

丈夫な体を持ち
じょうぶ からだ も

欲はなく
よく

決して怒らず
けっ いか

いつも静かに笑っている
しず わら

『竹』

萩原朔太郎
はぎわらさくたろう

かたき地面に竹が生え、
かたき じめん たけ は

地上にするどく竹が生え、
ちじょう たけ は

まつしぐらに竹が生え、
まつ たけ は

凍れる節節りんりと、
こお ふしぶし

青空のもとに竹が生え、
あおぞら たけ は

竹、竹、竹が生え。
たけ たけ たけ は

『道程』

どうてい

高村光太郎
たかむらこうたろう

僕の前に道はない

ぼく まえ みち

僕の後ろに道は出来る

ぼく うし みち でき

ああ、自然よ

しぜん

父よ

ちち

僕を一人立ちにさせた広大な父よ

ぼくひとりだ こうだい ちち

僕から目を離さないで守ることをせよ

ぼく め はな まも

常に父の気魄を僕に充たせよ

つね ちち きはく ぼく み

この遠い道程のため

とお どうてい

この遠い道程のため

とお どうてい

『嫌い箸』

きら

ばし

①

小橋好代
おはし すきよ

指し箸

さし ばし

刺し箸

さし ばし

探り箸

さぐり ばし

立て箸

たて ばし

横箸

よこばし

迷い箸

まよ ばし

空箸

そらばし

寄せ箸

よ ばし

移り箸

うつ ばし

涙箸

なみだばし

舐り箸

ねぶり ばし

渡し箸

わた ばし

『浮雲』

うきぐも

二葉亭四迷
ふたばていしめい

口髭、頬髯、顚の鬚、
くちひげ ほおひげ あごひげ

暴に興起した拿破崙髭に、
やけ おや ナポレオン ひげ

狎の口めいた比斯馬克髭、
ちん くち ビスマルク ひげ

そのほか矮鷄髭、貉髭、
ちやほ ひげ むじなひげ

ありやなしやの幻の髭と、
まぼろし ひげ

濃くも淡くも
こ うす

いろ／＼に生分る。
いろ はえわか

『平家物語』

へいけものがたり

①

語り手 琵琶法師
かた て びわほうし

祇園精舎の鐘の聲、
ぎおんしょうじや かね こえ

諸行無常の響きあり。
しよぎようむじよう ひび

娑羅双樹の花の色、
しやらそうじゆ はな いろ

盛者必衰の理をあらはす。
じようしやひつすい ことわり わ

おごれる人も久しからず、
ひと ひさ

唯春の世の夢のごとし。
ただはる よ ゆめ

たけき者も遂には滅びぬ、
もの つい ほろ

偏に風の前の塵に同じ。
ひとえ かぜ まえ ちり おな

『偶成』
ぐうせい

朱熹
しゆき

少年易老學難成
しょうねんおいやすくがくなりがたし

一寸光陰不可輕
いっすんのこういんかろんずべからず

未覺池塘春草夢
いまださめずちとうしゆんそうのゆめ

階前梧葉已秋聲
かいぜんのごようすでにしゆうせい

『春曉』
しゆんぎよう

孟浩然
もうこうねん

春眠不覺曉
しゆんみんあかつきをおぼえず

處處聞啼鳥
しよしよていちようをきく

夜來風雨聲
やらいふううのこえ

花落知多少
はなおつることしんぬたしようにぞ

『靜夜思』

李白

床前看月光

疑是地上霜

舉頭望山月

低頭思故鄉

『春夜』

蘇軾

春宵一刻直千金

花有清香月有陰

歌管樓臺聲細細

鞦韆院落夜沈沈

『代悲白頭翁』

はくとうをかなしむおきなにかわる

劉希夷
りゆうきい

古人無復洛城東
こじん またらくじょうのひがしになく

今人還对落花風
こんじん またたいす らつかのかぜ

年年歳歳花相似
ねんねんさいさい はなあいにてり

歳歳年年人不同
さいさいねんねん ひとおなじからず

『春望』

しゅんぼう

杜甫
とほ

國破山河在
くにやぶれてさんがある

城春草木深
しろはるにしてそうもくふかし

感時花濺淚
ときにかんじてはなにもなみだをそそぎ

恨別鳥驚心
わかれをうらんでとりにもころをおどるかす

烽火連三月
ほうかさんげつにつらなり

家書抵萬金
かしょばんきんにあたる

白頭搔更短
はくとうかけばさらにもじかく

渾欲不勝簪
すべてしんにたえざらんとほつす

『月夜』

げつや

杜甫
とほ

今夜 鹿州月
こんや ふしゅうのつき

閨中 只独看
けいちゅう ただひとりみるらん

遥憐 小儿女
はるかにあわれむ しょうじじよの

未解 忆长安
いまだちようあんをおもうを かいせざるを

香雾 雲鬟 湿
こうむ うんかいうるおい

清輝 玉臂 寒
せいき ぎよくひ さむからん

何 時 倚 虚 幌
いずれのときか きよこうにより

双照 淚痕 乾
ならびてらされてるいこんかわかん

『垓下歌』

がいかのうた

項羽
こうう

力拔山兮 氣蓋世
ちからはやまをぬき きはよをおおう

時不利兮 騅不逝
ときにりあらずして すいゆかず

騅不逝兮 可奈何
すいゆかざるを いかんすべき

虞兮 虞兮 奈若何
ぐやぐや なるんじをいかなせん

『風林火山』

ふうりんかざん

武田信玄
たけだ しんげん

疾如風
はやきこと かぜのごとく

徐如林
しずかなること はやしのごとく

侵掠如火
しんりやくすること ひのごとく

不動如山
うごかざること やまのごとし

『不識庵機山擊凶題』

ふしきあんきざんをうつのずのだいす

頼山陽
らいさんよう

鞭声肅肅夜過河
べんせいしゆくしゆく よるかわをわたる

曉見千兵擁大牙
あかつきにみる せんぺいのたいがをようするを

遺恨十年磨一劍
いこんじゅうねん いっけんをみがき

流星光底逸長蛇
りゅうせいこうてい ちようだをいつす

『将東遊壁題』

まさにとうゆうせんとしてかべにだいたす

釈月性
しゃくげつしょう

男児立志出郷関
だんじこころざしをたててきょうかんをいす

学若无成不復還
がくもしなるなくんばまたとはかえらず

埋骨何期墳墓地
ほねをうずむるになんぞきせんふんぼのち

人間到处有青山
じんかんいたるところせいざんあり

『陽関三疊』

ようかんさんじょう

(元二の安西に使用するを送る)
げんじあんせいつかいおく

王維
おうい

渭城の朝雨 軽塵を潤し
いじょうちやううけいじんうるお

客舎青青柳色新たなり
かくしゃせいせいりゆうしよくあら

君に勧む 更に尽せよ一杯の酒
きみすすさらつくいっぱいさけ

西のかた 陽関を出づれば
にしようかんい

故人 無からん
こじんな

無からん 無からん
なな

故人 無からん
こじんな

西のかた 陽関を出づれば
にしようかんい

故人 無からん
こじんな

『論語・学而第一』

孔子

子曰く、

学びて時にこれを習う、

亦説ばしからずや。

朋有り遠方より来たる、

亦樂しからずや。

人知らずして慍みず、

亦君子ならずや。

『論語・爲政第二』

孔子

吾十有五にして

学に志す。

三十にして

立つ。

四十にして

惑わず。

五十にして

天命を知る。

六十にして

耳順う。

七十にして

心の欲する所に従って、

矩を踰えず。

『竹取物語』

たけとりものがたり

①

今は昔、

いまむかし

竹取の翁といふものありけり。

たけとりおきな

野山にまじりて、

のやま

竹を取りつゝ、

たけとつ

萬の事に使ひけり。

よろずことつかい

名をば讚岐造となむいひける。

なさぬきのみやういひ

『竹取物語』

たけとりものがたり

②

その竹の中に、

たけなか

本光る竹一筋ありけり。

もとひかたけひとすじ

怪しがりて寄りて見るに、

あやよみ

筒の中光りたり。

つつなかひか

それを見れば、

み

三寸ばかりなる人、

さんずんひと

いと美しうて居たり。

うつくしゅうい

『伊勢物語』

いせものがたり

昔、男、
むかし おとこ

初冠して奈良の京、
ういこうなり なら きょう

春日の里にしるよしして、
かすが さと

狩にいにけり。
かり

その里に、
さと

いとなまめいたる女
おんな

はらから住みけり。
す

この男かいまみてけり。
おとこ

『土佐日記』

とさにつぎ

紀貫之
きのつらゆき

男もすなる日記といふものを、
おとこ にっき

女もしてみむとてするなり。
おんな

某年の十二月の
そのとし しわす

二十日余一日の日の
はつか あまりひとひ

戌の刻に、門出す。
いぬ とき かど

その由、
よし

いさ、かものにかきつく。
かさ

『古今和歌集』

こきん わかしゅう

① (仮名序)

かなじよ

紀貫之
きのつらゆき

和歌は、人の心を種として、
やまごうた ひと こころ たね

万の言の葉とぞなれりける。
よろず こと は

世の中にある人、
よ なか ひと

事・業繁きものなれば、
こと わざ しげ

心に思ふ事を、
こころ おも うこと

見るもの聞くものにつけて、
み き

言ひ出せるなり。
げん だ

『古今和歌集』

こきん わかしゅう

②

花に鳴く鶯、
はな な うぐいす

水に住む蛙の声を聞けば、
みず す かわず こえ き

生きとし生けるもの、
い い

いづれか歌をよまざりける。
いづれか 歌をよまざりける。

力をも入れずして天地を動かし、
ちから い あめつち うご

目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、
め み おにがみ わ おもわ

男女のなかをもやはらげ、
おとこおんな わ

猛き武士の心をも慰むるは、
たけ もののふ こころ なぐさむ

歌なり。
うた

調整ページ

『枕草子』

まくらごそし

清少納言
せいしょうなごん

春はあけぼの。

はる

やうやう白くなりゆく、

よよしろ

山ぎは少しあかりて、

やまわすこ

紫だちたる雲の

むらさきくも

細くたなびきたる。

ほそ

①

春

はる

夏は夜。

なつよる

月の頃はさらなり、

つきころ

やみもなほ、

お

螢の多く飛びちがひたる。

ほたるおおと

また、ただ一つ二つなど、

ひとふた

ほのかにうち光りて

ひか

行くもをかし。

いお

雨など降るもをかし。

あめふお

②

夏

なつ

秋は夕暮れ。

夕日のさして、

山の端いと近うなりたるに、

からすの寝どころへ行くとして、

三つ四つ、二つ三つなど、

飛び急ぐさへあはれなり。

まいて、雁などのつらねたるが、

いと小さく見ゆるは

いとをかし。

日入り果てて、

風の音、虫の音など、

はた言ふべきにあらず。

③ 秋

冬はつとめて。

雪の降りたるは

言ふべきにもあらず、

霜のいと白きも、

またさらでもいと寒きに、

火など急ぎおこして、

炭もてわたるも

いとつきづきし。

昼になりて、

ゆるくゆるびもていけば、

火桶の火も

白き灰がちになりてわろし。

④ 冬

『源氏物語』

げんじものがたり

紫式部

むらさきしき

いづれの御時にか、

おおんととき

女御、更衣あまた

にょご

こぎ

さぶらひたまひけるなかに、

い

いとやむごとなき際にはあらぬが、

ん

きわ

すぐれて時めきたまふありけり。

とき

も

う

『方丈記』

ほうじょうき

鴨長明

かもちようめい

ゆく河の流れは絶えずして、

かわ

なが

た

しかももとの水にあらず。

みず

よどみに浮かぶうたかたは、

う

かつ消えかつ結びて、

き

むす

久しくとどまりたるためしなし。

ひさ

『徒然草』

つれづれぐさ

つれづれなるままに、

日暮らし、

ひぐ

硯に向かひて、

すずり

む

い

心にうつりゆく

こころ

よしなしごとを、

そこはかとなく

書きつくれば、

か

あやしうこそ

しゆう

ものぐるほしけれ。

お

吉田兼好
よしだけんこう

『奥の細道』

おく

ほそみち

松尾芭蕉
まつおぼしやう

月日は百代の過客にして、

つきひ

はくたい

かかく

行かふ年も又旅人也。

ゆき

うとし

また

たびびとなり

舟の上に生涯をうかべ、

ふね

うえ

しょうがい

馬の口とらえて

うま

くち

老をおかふる物は、

おい

う

もの

日々旅にして旅を栖とす。

ひ

びたび

たび

すみか

古人も多く旅に死せるあり。

こじん

おお

たび

し

『吾輩は猫である』

わがはい ねこ

夏目漱石
なつめ そうせき

吾輩は猫である。

わがはい ねこ

名前はまだない。

なまえ

どこで生まれたか

う

とんと見当がつかぬ。

けんとう

何でもうす暗い

なん

ぐら

じめじめした所で

ところ

ニヤーニヤー

泣いていた事だけは

な

記憶している。

きおく

『坊っちゃん』

ぼ

夏目漱石
なつめ そうせき

親譲りの無鉄砲で

おやゆず

むてつぱう

小供の時から

こども

とき

損ばかりしている。

そん

小学校に居る時分

しょうがっこう

お

じぶん

学校の二階から飛び降りて

がっこう

にかい

と

お

一週間ほど

いっしゅうかん

腰を抜かした事がある。

こし

ぬ

こと

『草枕』

くさまくら

夏目漱石
なつめ そうせき

山路を登りながら、
やまみち のぼ

こう考えた。
かんが

智に働けば角が立つ。
ち はたら かど た

情に棹させば流される。
じょう さお なが

意地を通せば窮屈だ。
いじ とお きめうくつ

兎角に人の世は住みにくい。
とかくひとよす

『こころ』

夏目漱石
なつめ そうせき

私はその人を常に
わたし ひと つね

先生と呼んでいた。
せんせい よ

だからここでも

ただ先生と書くだけで
ただ せんせい か

本名は打ち明けない。
ほんみょう う あ

これは世間をはばかる
これ せけん

遠慮というよりも、
えんりよ

そのほうが私にとって
わたし

自然だからである。
しぜん

調整ページ

『舞姫』

まいひめ

森鷗外
もりおうがい

石炭をば早や積み果てつ。

せきたん

は

中等室の卓のほとりは

ちゅうとうしつ

つくえ

いと静にて、

しずか

熾熱燈の光の

しねつとう

ひかり

晴れがましきも徒なり。

は

いたづら

今宵は夜毎にこゝに集ひ来る

こよい

よごと

こ

つと

く

骨牌仲間も「ホテル」に宿りて、

カルタ

なかま

やど

舟に残れるは

ふね

のこ

余一人のみなれば。

よひとり

『たけくらべ』

樋口一葉
ひぐちいちよう

廻れば大門の

まわ

おおもん

見返り柳いと長けれど、

みかえ

やなぎ

なが

お齒ぐる溝に燈火うつる

は

どろ

ともしび

三階の騒ぎも手に取る如く、

さんがい

さわ

て

と

ごと

明けくれなしの車の行来に

あ

くるま

ゆき

き

はかり知られぬ

し

全盛をうらなひて……。

ぜんせい

い

『蜘蛛の糸』

芥川龍之介
あくたがわりゆうのすけ

或日の事でございます。

あるひ こと

御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、

おしゃかさま ごくらく はすいけ

独りでぶらぶら

ひと

御歩きになつていらつしやいました。

おある

池の中に咲いている蓮の花は、

いけ なか さ はす はな

みんな玉のようにまっ白で、

たま しろ

そのまん中にある金色の蕊からは、

なか きんいろ ずい

何とも云えない好い匂が、

なん い よ におい

絶間なくあたりへ溢れて居ります。

たえま あふ お

極楽は丁度朝なのでございましょう。

ごくらく ちようど あさ

『羅生門』

芥川龍之介
あくたがわりゆうのすけ

ある日の暮方の事である。

ひ くれかた こと

一人の下人が、

ひとり げにん

羅生門の下で

らしようもん した

雨やみを待っていた。

あま ま

広い門の下には、

ひろ もん した

この男のほかに誰もいない。

おとこ だれ

ただ、所々丹塗の剥げた、

ところどころにぬり は

大きな丸柱に、

おお まるばしら

蟋蟀が一匹とまっている。

きりぎりす いっぴき

『走れメロス』

はし

太宰治
だざいおさむ

メロスは激怒した。

げきど

必ず、かの邪智暴虐の王を

かなら

じやちぼうぎやく おう

除かなければならぬと決意した。

のぞ

けつい

メロスには政治がわからぬ。

せいじ

メロスは、村の牧人である。

むら ぼくじん

笛を吹き、

ふえ

羊と遊んで暮して来た。

ひつじ

あそ

くら

き

けれども邪悪に対しては、

じやあく たい

人一倍に敏感であった。

ひといちばい

びんかん

『五重塔』

ご じゅうのとう

幸田露伴
こうだろはん

材を斫る斧の音、

き はつ

よき おと

板削る鉋の音、

いたけず

かなな おと

孔を鑿るやら釘打つやら

あな

ほ

くぎう

丁々かちかち響忙しく、

ちようちよう

ひびきせわ

木片は飛んで疾風に

こつぱ

と

しつぷう

木の葉の翻へるが如く、

こ

は

ひるがえ

ごと

鋸屑舞って晴天に雪の降る

おがくず

せいてん

ゆき

ふ

感応寺境内普請場の

かんのう

じ けいだい ふしんば

景況賑やかに…

ありさま

にぎ

『名人伝』

めいじんてん

中島敦
なかじまあつし

ある日ふと気が付くと、

ひ き つ

窓の風が馬のような大ききさに見えていた。

まど しらみ うま

おお

占めたど、紀昌は膝を打ち、表へ出る。

し

きしやう ひざ

う おもて で

彼は我が目を疑った。

かれ わ

め うたが

人は高塔であった。

ひと こうとう

うたが

馬は山であった。

うま やま

うたが

豚は丘のごとく、

ぶた おか

うたが

鶏は城楼と見える。

にわとり じやうろう

うたが

雀躍して家にとって返した紀昌は、

じやくやく いえ

かえ きしやう

再び窓際の風に立向い、

ふたたび まどぎわ

しらみ たちむか

燕角の弧に朔蓬の籜をつがえて

えんかく ゆみ

さくほう やから

これを射れば、

これを射れば

矢は見事に風の心の臓を貫いて、

や みごと

しらみ しんぞう つらぬ

しかも風を繋いだ毛さえ断れぬ。

しかも風を繋いだ毛

を繋いだ毛さえ断れぬ

『山月記』

さんげつき

中島敦
なかじまあつし

隴西の李徴は博学才穎、

ろうさい りちやう

はくがくさいい

天宝の末年、

てんぽう まつねん

若くして名を虎榜に連ね、

わか な

こぼう つら

ついで江南尉に補せられたが、

ついで江南尉に補せられたが

性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く、

せい けんかい みずか たの

すこぶ あつ

賤吏に甘んずるを潔しとしなかつた。

せんり あま

いさぎよ

いくばくもなく官を退いた後は、

いくばくもなく官を退いた後は

故山、號略に帰臥し、

こざん かくりやく

きが

人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽った。

ひと まじわり

た しさく ふけ

下吏となつて長く膝を

下吏となつて長く膝を

俗悪な大官の前に屈するよりは、

ぞくあく たいかん まえ

くつ

詩家としての名を

詩家としての名を

死後百年に遺そうとしたのである。

死後百年に遺そうとしたのである

しごひやくねん のこ

『宮本武蔵』

みやもと むさし

吉川英治
よしかわえいじ

宮本武蔵のあるいた生涯は、
みやもと むさし しょうがい

煩惱と闘争の生涯であったといえよう。
ぼんのう とうそう しょうがい

もちろん世代は遠く違うが、
ぼんのう とうそう せだい とお ちが

その二点では現代人もおなじ苦悩を
に てん げん だい じん く のう

まだ脱しきれてはいない。
まだ だつ

武蔵のばあいは、しかし、
むさし

もつとも闘争社会の赤裸な時代であった。
もつ とも とう そう しゃ かい せき ら じ だい

そして当然、かれも持つ本能の相のまま、
そ して たう ぜん も も つ つ ほん のう の あ い ま ま

なやみ、もがき、猛り泣いて、
な や み も が き もう げん のう す が た

かかる人間宿命を、一箇の剣に具象し、
か か る 人 間 しゆ めい を い つ こ けん ぐ し やう

その修羅道から救われるべき
その しゆ ら どう か ら す く わ れ る べ き

「道」をさがし求めた
「 みち 」 を さ が し も と め た

生命の記録が彼であったのだ。
せい めい の き ろく が か れ で あ っ た の だ 。

『平家物語』

へいけものがたり

語り手 琵琶法師

祇園精舎の鐘の聲、
諸行無常の響きあり。

娑羅双樹の花の色、

盛者必衰の理をあらはす。

おごれる人も久しからず、

唯春の世の夢のごとし。

たけき者も遂には滅びぬ、

偏に風の前の塵に同じ。

遠く異朝をとぶらへば、

秦の趙高、漢の王莽、

梁の周伊、唐の禄山、

是等は皆、

旧主先皇の政にもしたがはず、

楽みをきはめ、

諫をも思ひいれず、

天下の乱れむ事をさとらずして、

民間の愁ふる所を知らざッしかば、

久しからずして、

亡じにし者ども也。

平家物語 ②

近く本朝をうかがふに、
ちか ほんちよう

承平の将門、天慶の純友、
しょうへい まさかど てんぎよう すみとも

康和の義親、平治の信頼、
こうわ ぎしん へいじ のぶより

此等はおごれる心もたけき事も、
これら こころ

皆とりぐにこそありしかども、
みな どり

まぢかくは六波羅の入道
ろくはら にゅうどう

前太政大臣
さきのだいじようだいじん

平朝臣清盛公
たいらのあつそんきよもりこう

と申しし人の有様、
もう ひと ありさま

伝へ承るこそ、
つたえうけたまわ

心も詞も及ばれね。
こころば およ

平家物語
へいけものがたり
③

『太平記』①

たいへいき

小島法師
こじまほうし

落花の雪に踏み迷ふ、
らっか ゆき ふ まよう

交野の春の桜狩り、
かたの はる さくらが

紅葉の錦を衣て帰る、
もみじ にしき き かえ

嵐の山の秋の暮、
あらし やま あきくれ

一夜を明かす程だにも、
ひとよ あほど

旅宿となればもの憂きに、
たびね う

恩愛の契り浅からぬ、
おんあい ちぎ あさ

『太平記』②

たいへいき

わが故郷の妻子をば、
ふるさと つまこ

行末も知らず思ひ置き、
ゆくえ し おもいお

年久しくも住み馴れし、
としひさ す な

九重の帝都をば、
ここのえい ていと

今を限りと顧みて、
いま かぎ かえり

思はぬ旅に出で給ふ、
おもわ たび い たもう

心の中ぞ哀れなる。
こころのうち あわ

『曾根崎心中』①

そねざきしんじゆう

近松門左衛門
ちかまつもんざえもん

この世の名残り、夜も名残り。
よなごよなご

死に行く身をたとふれば
しにゆみ

あだしが原の道の霜。
はらみちしも

一足づゝに消えて行く
ひとあしつゝき

夢の夢こそ哀れなれ。
ゆめゆめあわ

あれ数ふれば暁の、
かぞうあかつき

七つの時が六つ鳴りて、
ななときむな

残る一つが今生の、
のこひとこんじゆう

鐘の響きの聞き納め。
かねひびきおひ

寂滅為楽と響くなり。
じやくめついらくひび

『曾根崎心中』②

そねざきしんじゆう

鐘ばかりかは、草も木も
かねくさき

空も名残りと見上ぐれば、
そらなごみあ

雲心なき水の面、
くもこころみずおと

北斗は冴えて影うつる
ほくとさかげ

星の妹背の天の河。
ほしいもせあまがわ

梅田の橋を鵲の
うめだはしかささぎ

橋と契りていつまでも、
はしちぎ

われとそなたは女夫星。
めおとぼし

必ず添ふとすがり寄り、
かならそうよ

二人がなかに降る涙、
ふたりふなみだ

川の水嵩も勝るべし。
かわみかさまさ

『弁天娘女男白浪』①

べんてんむすめ おのしらなみ

河竹黙阿弥
かわたけもくあみ

知らざあ言つて聞かせやしよう。

浜の真砂と五右衛門が、

歌に残せし盗人の、

種は尽きねえ七里ヶ浜、

その白浪の夜働き、

以前をいやあ江の島で、

年季勤めの児ヶ淵。

百味講で散す時銭を、

当てに小皿の一文子、

百が二百と賽銭の、

くすね銭せえだんだんに、

『弁天娘女男白浪』②

べんてんむすめ おのしらなみ

悪事のはのぼる上の宮、

岩本院で講中の

枕探しも度重り、

お手長講の札付きに、

とうく島を追いだされ、

それから若衆の美人局、

こゝや彼処の寺島で、

小耳に聞いた音羽屋の

似ぬ声色で小ゆすりかたり、

名さえ由縁の

弁天小僧菊之助たア、

おれがことだ。

『南京玉簾』

なんきんたますだれ

①

アさて アさて

アさてさてさてさて

さては南京玉簾

なんきんたますだれ

チヨイと伸ばせば のチヨイと伸ばせば

浦島太郎さんの魚釣り竿に

うらしまたろう

うおつ おお

チヨイと似たり に

浦島太郎さんの魚釣り竿が

うらしまたろう

うおつ おお

お目にとまればお慰み なぐさ

お目にとまれば元へと返す

め

もと かえ

元へと返す

もと かえ

『南京玉簾』

なんきんたますだれ

②

アさて アさて

アさてさてさてさて

さては南京玉簾

なんきんたますだれ

ちよいと返せば かえちよいと返せば かえ

日本三景は にほんさんけい天の橋立 あまはしだて

浮かぶ白帆に うしらはほさも似たり に

浮かぶ白帆が うしらはほ

お目にとまれば元へと返す め

元へと返す もと

かえ

『金色夜叉』

こんじきやしゃ

①

尾崎紅葉
おちきこうよう

ああ
みい
呼、宮さん

こ
ふたり
いっしょ
かうして二人が一処に居るのも

こんや
今夜かぎりだ。

まえ
ぼく
かいほう
お前が僕の介抱をしてくれるのも

こんや
今夜かぎり、

ぼく
まえ
もの
いう
僕がお前に物を言ふのも

こんや
今夜かぎりだよ。

『金色夜叉』

こんじきやしゃ

②

いちがつ
じゅうしちにち
一月の十七日、

みい
よ
おほ
おほ
宮さん、善く覚えてお置き。

らいねん
こんげつこんや
来年の今月今夜は、

かんいち
どこ
つき
み
貫一は何処でこの月を見るのだから！

さいらいねん
こんげつこんや
再来年の今月今夜……

じゅうねんのち
こんげつこんや
十年後の今月今夜……

いっしょう
とお
ぼく
一生を通して僕は

こんげつこんや
わす
わす
今月今夜を忘れん、

わす
忘れれるものか、

し
ぼく
わす
死んでも僕は忘れんよ！

『金色夜叉』
こんじきやしや
③

可いいか、宮みさん、

一いち月の十七日だ。
じゆうしちにち

来らい年の今こん月げつ今こん夜やになつたらば、

僕ぼくの涙なみだで必かなず月つきは

曇くもらして見みせるから、

月つきが……月つきが……月つきが……

曇くもつたらば、宮みさん、

貫かん一いちは何どこ処こかでお前まえを恨うらんで、

今こん夜やのやうに

泣ないてゐると思おもつてくれ。

『小景異情』(その二)

室生犀星
むろ う さい せい

ふるさとは遠とおきにありて思おもふもの

そして悲かなしくうたふもの

よしや

うらぶれて異土いどの乞食かたいとなるとても

帰かえるところにあるまじや

ひとり都みやこのゆふぐれに

ふるさとおもひ涙いなみだぐむ

そのころもて

遠とおきみやこにかへらばや

遠とおきみやこにかへらばや

『旅上』

萩原朔太郎
はぎ なら さく たろう

ふらんすへ行ゆきたしと思おもへども

ふらんすはあまりにも遠とおし

せめては新あたしき背広せびろを着きて

きままなる旅たびにいでてみん。

汽車きしやが山道やまみちをゆくとき

みづいろの窓まどによりかかりて

われひとりうれしきことをおもはむ

五月ごがつの朝あさのしのめ

うら若草わかぐさのもえいづる心こころまかせに。

『汚れつちまつた悲しみに……』 ①

中原中也
なかはらちゆうや

汚れつちまつた悲しみに
よご かな

今日も小雪の降りかかる
きょう こゆき ふ

汚れつちまつた悲しみに
よご かな

今日も風さえ吹きすぎる
きょう かぜ ふ

汚れつちまつた悲しみに
よご かな

たとえば狐の革裘
きつね かわしろも

汚れつちまつた悲しみに
よご かな

小雪のかかつてちぢこまる
こゆき

『汚れつちまつた悲しみに……』 ②

汚れつちまつた悲しみに
よご かな

なにのぞむなくねがうなく

汚れつちまつた悲しみに
よご かな

懈怠のうちに死を夢む
けだい し ゆめ

汚れつちまつた悲しみに
よご かな

いたいたしくも怖気づき
おじけ

汚れつちまつた悲しみに
よご かな

なすところもなく日は暮れる
ひ

『落葉』
らくよう

ヴェルレーヌ

上田敏訳
うえだ びん やく

秋の日の
あき ひ

ギオロンの
ヴィ

ためいきの

身にしみて
み

ひたぶるに

うら悲し。
かな

鐘のおとに
かね

胸ふたぎ
むね

色かへて
いろ え

涙ぐむ
なみだ

過ぎし日の
すひ

おもひでや。
い

げにわれは

うらぶれて

こゝかしこ

さだめなく

とび散らふ
ちろう

落ち葉かな。
おほ

『初恋』①

はつこい

島崎藤村
しまざきとうそん

まだあげ初めし前髪まへがみの

林檎りんごのもとに見えしとき

前にさしたる花櫛はなぐしの

花はなある君きみと思ひいけり

やさしく白しろき手てをのべて

林檎りんごをわれにあたへしは

薄紅うすくれないの秋あきの實みに

人ひとこひ初いめしはじめなり

『初恋』②

はつこい

わがこころなきためいきの

その髪かみの毛けにかゝるとき

たのしき恋こいの盃さかずきを

君きみが情なさけに酌くみしかな

林檎畑りんごばたけの樹この下したに

おのづからなる細道ほそみちは

誰たが踏ふみそめしかたみぞと

問とひたまふこそこひしけれ

『サーカス』①

中原中也
なかはらちゅうや

幾時代かがありまして
いくじだい

茶色い戦争ありました
ちやいろ せんそう

幾時代かがありまして
いくじだい

冬は疾風吹きました
ふゆ しつぷう

幾時代かがありまして
いくじだい

今夜此処での一と殷盛り
こんやここ ひさか

今夜此処での一と殷盛り
こんやここ ひさか

サーカス小屋は高い梁
ごや たか はり

そこに一つのブランコだ
ひと

見えるともないブランコだ
み

頭倒さに手を垂れて
あたまさか て

『サーカス』②

汚れ木綿の屋蓋のもと
よご もめん やね

ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

それの近くの白い灯が
ちか しろ ひ

安値いりボンと息を吐き
やす いき は

観客様はみな弱
かんきやくさま いわし

咽喉が鳴ります牡蠣殻と
のんど な かきがら

ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

屋外は真ツ闇 闇の闇
やがい ま くら くら くら

夜は劫々と更けまする
よ こうこう ふ

落下傘奴のノスタルヂアと
らっか がさめ

ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

調整ページ

『大漁』

た い り よ う

金子みすゞ
かねこ

朝焼小焼だ
あさやけこやけ

大漁だ
た い り よ う

大羽鰹の
おおばいわし

大漁だ。
た い り よ う

浜は祭の
はま まつり

ようだけど

海のなかでは
うみ

何萬の
なんまん

鰹のとむらい
いわし

するだろう。

『私と小鳥と鈴と』

わ た し こ と り

金子みすゞ
かねこ

私が両手をひろげても、
わ た し り よ う て

お空はちっとも飛べないが、
そ ら

飛べる小鳥は私のように、
と こ と り わ た し

地面を速くは走れない。
じ め ん は や は し

私がからだをゆすっても、
わ た し

きれいな音は出ないけど、
お と で

あの鳴る鈴は私のように、
な すず わ た し

たくさんな唄は知らないよ。
う た し

鈴と、小鳥と、それから私、
すず こ と り わ た し

みんなちがって、みんないい。

『不思議』

金子みすゞ

私は不思議でたまらない、
黒い雲からふる雨が、
銀にひかっていることが。
私は不思議でたまらない、
青い桑の葉たべている、
蚕が白くなることが。
私は不思議でたまらない、
たれもいじらぬ夕顔が、
ひとりではらりと開くのが。
私は不思議でたまらない、
誰にきいても笑ってて、
あたりまえだ、ということが。

『星とたんぽぽ』

金子みすゞ

青いお空の底ふかく、
海の小石のそのやうに、
夜がくるまで沈んでる、
昼のお星は眼にみえぬ。
見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬものでもあるんだよ。
散つてすがれたたんぽぽの、
瓦のすきに、だアまって、
春がくるまでかくれてる、
つよいその根は眼にみえぬ。
見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬものでもあるんだよ。

『竹』①

たけ

萩原朔太郎
はぎわらさくたろう

ますぐなるもの地面に生え、
じめん は

するどき青きもの地面に生え、
あお じめん は

凍れる冬をつらぬきて、
こお ふゆ

そのみどり葉光る朝の空路に、
はひか あさ そらじ

なみだたれ、
なみだをたれ、

いまはや懺悔をはれる肩の上より、
ざんげ かた うえ

けぶれる竹の根はひろがり、
たけ ね

するどき青きもの地面に生え。
あお じめん は

『竹』②

たけ

光る地面に竹が生え、
ひか じめん たけ は

青竹が生え、
あおたけ は

地下には竹の根が生え、
ちか たけ ね は

根がしだいにほそらみ、
ね

根の先より纖毛が生え、
ね さき せんもう は

かすかにけぶる纖毛が生え、
せんもう は

かすかにふるえ。

『竹』③

かたき地面に竹が生え、
じめん たけ は

地上にするどく竹が生え、
ちじょう たけ は

まつしぐらに竹が生え、
たけ は

凍れる節節りんりと、
こお ふしぶし

青空のもとに竹が生え、
あおぞら たけ は

竹、竹、竹が生え。
たけ たけ たけ は

『竹』④

みよすべての罪はしるされたり、
つみ

されどすべては我にあらざりき、
われ

まことにわれに現はれしは、
あらわ

かげなき青き炎の幻影のみ、
あお ほのお げんえい

雪の上に消えさる哀傷の幽霊のみ、
ゆき うえ き あいしょう ゆうれい

ああかかる日のせつなる懺悔をも何かせむ、
ひ ざんげ なに

すべては青きほのほの幻影のみ。
あお お げんえい

『落葉松』①

か
ら
まつ

一

北原白秋
きたはらはくしゆう

からまつの 林を過ぎて

はやし
す

からまつを しみじみと見き。

み

からまつは さびしかりけり。

たびゆくは さびしかりけり。

二

からまつの 林を出でて、

はやし
い

からまつ の 林に入りぬ。

はやし
い

からまつ の 林に入りて、

はやし
い

また細く 道はつづけり。

ほそ
みち



『落葉松』②

か
ら
まつ

三

からまつの 林の奥も

はやし
おく

わが通る 道はありけり。

とお
みち

霧雨の かかる道なり。

きりさめ

山風のかよふ道なり。

やまかぜ

うみち

四

からまつの 林の道は、

はやし
みち

われのみか、 ひともしかよひぬ。

い

ほそぼそと 通ふ道なり。

かようみち

さびさびと いそぐ道なり。

みち



『落葉松』③
からまつ

五

からまつの 林を過ぎて、

ゆゑえしらず 歩みあゆひそめつ。

からまつは さびしかりけり、

からまつと ささやきにけり。

六

からまつの 林を出でて、

浅間嶺に けぶり立つ見つ。

浅間嶺に けぶり立つ見つ。

からまつの またそのうへに。



『落葉松』④
からまつ

七

からまつの 林の雨は

さびしけど いよよしづけし。

かんこ鳥どり 鳴けるのみなる。

からまつの 濡るるのみなる。

八

世の中よ、 あはれなりけり。

常なれど うれしかりけり。

山川に 山がはの音、

からまつに からまつのかぜ。

『雨ニモマケズ』①

あめ

宮沢賢治
みやざわけんじ

雨にも負けず
あめ ま

風にも負けず
かぜ ま

雪にも夏の暑さにも負けぬ
ゆき なつ あつ ま

丈夫な体を持ち
じょうぶ からだ も

欲はなく
よく

決して怒らず
けっ いか

いつも静かに笑っている
しず ちら

『雨ニモマケズ』②

あめ

一日に玄米四合と
いちにち げんまいよんごう

味噌と少しの野菜を食べ
みそ すこ やさい た

あらゆることを

自分を勘定に入れずに
じぶん かんじょう い

よく見聞きし分かり
み き わ

そして忘れず
わす

『雨ニモマケズ』③

野原の松の林の陰の

小さな茅葺きの小屋にいて

東に病気の子供あれば

行って看病してやり

西に疲れた母あれば

行ってその稻の束を負い

南に死にそうな人あれば

行って怖がらなくてもいいと言い

北に喧嘩や訴訟があれば

つまらないから止めろと言い

『雨ニモマケズ』④

日照りの時は涙を流し

寒さの夏はおろおろ歩き

みんなにデクノボーと呼ばれ

褒められもせず

苦にもされず

そういうものに

わたしはなりたい

春の七草

はる ななくさ

芹

せり

薺

なずな

御形

ごぎょう

繁縷

はこべら

仏の座

ほとけざ

菘

すずな

蘿蔔

すずしろ

これぞ七草

ななくさ

秋の七草

あき ななくさ

山上憶良

やまのうえのおくら

萩の花

はぎはな

尾花

おぼな

葛花

くずばな

瞿麦の花

なでしこはな

女郎花

おみなえし

また藤袴

ふじばかま

朝貌の花

あさがおはな

六輝(六曜)
ろっ き ろく よう

先勝
せんしょう

友引
ともびき

先負
せんぶ

仏滅
ぶつめつ

大安
たいあん

赤口
しゃっこう

一息ですばやく唱え、覚えましょう。

二十四節気 (平成26年版)

に じゅう し せつ き

へいせい ねんぼん

小寒

しょうかん

1/5

小暑

しょうしょ

7/7

大寒

だいかん

1/20

大暑

たいしょ

7/23

立春

りっしゅん

2/4

立秋

りっしゅう

8/7

雨水

うすい

2/19

処暑

しょしょ

8/23

啓蟄

けいちつ

3/6

白露

はくろ

9/8

春分

しゅんぶん

3/21

秋分

しゅうぶん

9/23

清明

せいめい

4/5

寒露

かんろ

10/8

穀雨

こくう

4/20

霜降

そうこう

10/23

立夏

りっか

5/5

立冬

りっとう

11/7

小満

しょうまん

5/21

小雪

しょうせつ

11/22

芒種

ぼうしゅ

6/6

大雪

たいせつ

12/7

夏至

げし

6/21

冬至

とうじ

12/22

「♪ぼくらはみんな～ いている～ いているから うたうんだ～♪」の繰り返しに乗せて

陰曆十二ヶ月

いんれきじゅうにかげつ

1月 睦月
むつき

2月 如月
きさらぎ

3月 弥生
やよい

4月 卯月
うづき

5月 皐月
さつき

6月 水無月
みなづき

7月 文月
ふみづき

8月 葉月
はづき

9月 長月
ながつき

10月 神無月
かんなづき

11月 霜月
しもつき

12月 師走
しわす

4つずつ、4拍子の束にして 読みましょう♪

むつき きさらぎ やよい うづき

さつき みなづき ふみづき はづき

ながつき かんなづき しもつき しわす

黄道十二星座

こ う ど う じ ゅ う に せ い ざ

おひつじ	牡羊座 <small>おひつじざ</small>	3/21～ 4/19
おうし	牡牛座 <small>おうしざ</small>	4/20～ 5/20
ふたご	双子座 <small>ふたござ</small>	5/21～ 6/21
かに	蟹座 <small>かにざ</small>	6/22～ 7/22
しし	獅子座 <small>ししざ</small>	7/23～ 8/22
おとめ	乙女座 <small>おとめざ</small>	8/23～ 9/22
てんびん	天秤座 <small>てんびんざ</small>	9/23～10/23
さそり	蠍座 <small>さそりざ</small>	10/24～11/22
いて(ぎ)	射手座 <small>いてざ</small>	11/23～12/21
やぎ	山羊座 <small>やぎざ</small>	12/22～ 1/19
みずがめ	水瓶座 <small>みずがめざ</small>	1/20～ 2/18
うお	魚座 <small>うおざ</small>	2/19～ 3/20

「ロンドン橋渡ろう♪」のリズムに乗って

♪おひつじ・おうし・ふたご/ かに・しし・おとめ/ てんびん・さそり・いてざ/ やぎ・みずがめ・うお♪

十二支

じゅう に し

- | | | | |
|----|----------|-------------|-------------|
| 1 | 子
ね | (鼠)
ねずみ | |
| 2 | 丑
うし | (牛)
うし | |
| 3 | 寅
とら | (虎)
とら | |
| 4 | 卯
う | (兔)
うさぎ | |
| 5 | 辰
たつ | (龍)
りゅう | |
| 6 | 巳
み | (蛇)
へび | |
| 7 | 午
うま | (馬)
うま | |
| 8 | 未
ひつじ | (羊)
ひつじ | |
| 9 | 申
さる | (猿)
さる | |
| 10 | 酉
とり | (鶏)
にわとり | |
| 11 | 戌
いぬ | (犬)
いぬ | |
| 12 | 亥
い | (猪)
いのしし | 日本
にほん |
| | | (豚)
ぶた | 中国
ちゅうごく |

一息ですばやく唱え、覚えましょう。

十干

じっかん

甲

こう

乙

おつ

丙

へい

丁

てい

戊

ぼ

己

き

庚

こう

辛

しん

壬

じん

癸

き

甲

きのえ

乙

きのと

丙

ひのえ

丁

ひのと

戊

つちのえ

己

つちのと

庚

かのえ

辛

かのと

壬

みずのえ

癸

みずのと

木の兄

き え

木の弟

き と

火の兄

ひ え

火の弟

ひ と

土の兄

つち え

土の弟

つち と

金の兄

か え

金の弟

か と

水の兄

みず え

水の弟

みず と

一息ですばやく唱え、覚えましょう。

五行

ごぎょう

木
もく

木
きの

火
か

火
ひの

土
ど

土
つちの

金
ごん

金
かの

水
すい

水
みずの

一息ですばやく唱え、覚えましょう。

四神相応

し じん そ う お う

四方

し ほう

東 (ひがし)

トウ

南 (みなみ)

ナン

西 (にし)

シャー

北 (きた)

ペー

四季①

し き

春 (はる)

しゅん

夏 (なつ)

か

秋 (あき)

しゅう

冬 (ふゆ)

とう

四季②

し き

青春

せい しゅん

朱夏

しゅ か

白秋

はく しゅう

玄冬

げん とう

四神

し じん

青龍

せい りゅう

朱雀

す ざく

白虎

びやっ こ

玄武

げん ぶ

いろ 色
すがた 姿
しら 調
べてみよう♪

とうなんしゃーペー しゅんかしゅうとう

せいしゅんしゅかはくしゅうげんとう せいりゅうすざくびやっこげんぶ

すばやく唱え、覚えましょう。

6の段 だん のぼ 上り ・ くだ 下り

$6 \times 1 =$	6	ろいちが ろく
$6 \times 2 =$	12	ろくに じゅうに
$6 \times 3 =$	18	ろくさん じゅうはち
$6 \times 4 =$	24	ろくし にじゅうし
$6 \times 5 =$	30	ろくご さんじゅう
$6 \times 6 =$	36	ろくろく さんじゅうろく
$6 \times 7 =$	42	ろくしち じゅうに
$6 \times 8 =$	48	ろくは じゅうはち
$6 \times 9 =$	54	ろくご じゅうし

3の段 だん のぼ 上り ・ くだ 下り

$3 \times 1 =$	3	さんいちが さん
$3 \times 2 =$	6	さんにか ろく
$3 \times 3 =$	9	さんさんが く
$3 \times 4 =$	12	さんし じゅうに
$3 \times 5 =$	15	さんご じゅうご
$3 \times 6 =$	18	さんぷろく じゅうはち
$3 \times 7 =$	21	さんしち にじゅういち
$3 \times 8 =$	24	さんぱ にじゅうし
$3 \times 9 =$	27	さんく にじゅうしち

5の段 だん のぼ 上り ・ くだ 下り

$5 \times 1 =$	5	ごいちが ご
$5 \times 2 =$	10	ごに じゅう
$5 \times 3 =$	15	ごさん じゅうご
$5 \times 4 =$	20	ごし にじゅう
$5 \times 5 =$	25	ごご にじゅうご
$5 \times 6 =$	30	ごろく さんじゅう
$5 \times 7 =$	35	ごしち さんじゅうご
$5 \times 8 =$	40	ごは じゅう
$5 \times 9 =$	45	ごっく じゅうご

2の段 だん のぼ 上り ・ くだ 下り

$2 \times 1 =$	2	にいちが に
$2 \times 2 =$	4	ににんが し
$2 \times 3 =$	6	にさんが ろく
$2 \times 4 =$	8	にしが はち
$2 \times 5 =$	10	にご じゅう
$2 \times 6 =$	12	にろく じゅうに
$2 \times 7 =$	14	にしち じゅうし
$2 \times 8 =$	16	にはち じゅうろく
$2 \times 9 =$	18	にく じゅうはち

4の段 だん のぼ 上り ・ くだ 下り

$4 \times 1 =$	4	しいちが し
$4 \times 2 =$	8	しにかが はち
$4 \times 3 =$	12	しさん じゅうに
$4 \times 4 =$	16	しし じゅうろく
$4 \times 5 =$	20	しご にじゅう
$4 \times 6 =$	24	しろく にじゅうし
$4 \times 7 =$	28	ししち にじゅうはち
$4 \times 8 =$	32	しは さんじゅうに
$4 \times 9 =$	36	しく さんじゅうろく

1の段 だん のぼ 上り ・ くだ 下り

$1 \times 1 =$	1	いんいちが いち
$1 \times 2 =$	2	いんにかが に
$1 \times 3 =$	3	いんさんが さん
$1 \times 4 =$	4	いんしが し
$1 \times 5 =$	5	いんごが ご
$1 \times 6 =$	6	いんろくが ろく
$1 \times 7 =$	7	いんしちが しち
$1 \times 8 =$	8	いんはちが はち
$1 \times 9 =$	9	いんくが く

掛け算九九

か ざん く く

9の段 上り · 下り

$9 \times 1 = 9$	くいちがく
$9 \times 2 = 18$	くに じゅうはち
$9 \times 3 = 27$	くさん にじゅうしち
$9 \times 4 = 36$	くし さんじゅうろく
$9 \times 5 = 45$	くご じじゅうご
$9 \times 6 = 54$	くろく ごじゅうし
$9 \times 7 = 63$	くち ろくじゅうさん
$9 \times 8 = 72$	くは しちじゅうに
$9 \times 9 = 81$	くはちじゅういち

通常は一の段から並んでいる九九を

九の段から並べました。

九の段から唱えることで、

不安定になりがちな七の段や八の段を

より確実に覚えられるでしょう。

七の段や八の段が難しいと言われるのは、

唱える機会が圧倒的に少ないからです。

二の段や五の段のように、

何度も繰り返し唱えていけば、

自然と覚えることができます。

8の段 上り · 下り

$8 \times 1 = 8$	はちいちが はち
$8 \times 2 = 16$	はちに じゅうろく
$8 \times 3 = 24$	はちさん にじゅうし
$8 \times 4 = 32$	はちし さんじゅうに
$8 \times 5 = 40$	はちご じじゅう
$8 \times 6 = 48$	はちろく じじゅうはち
$8 \times 7 = 56$	はちしち ごじゅうろく
$8 \times 8 = 64$	はっば ろくじゅうし
$8 \times 9 = 72$	はっく しちじゅうに

7の段 上り · 下り

$7 \times 1 = 7$	しちいちが しち
$7 \times 2 = 14$	しちに じゅうし
$7 \times 3 = 21$	しちさん にじゅういち
$7 \times 4 = 28$	しちし にじゅうはち
$7 \times 5 = 35$	しちご さんじゅうご
$7 \times 6 = 42$	しちろく じじゅうに
$7 \times 7 = 49$	しちしち じじゅうく
$7 \times 8 = 56$	しちは ごじゅうろく
$7 \times 9 = 63$	しちく ろくじゅうさん

昔は、九九八十一（ $9 \times 9 = 81$ ）から

順に、下りながら唱えていました。

そこで「九九」と呼ばれるようになったと

言われています。

2の冪乗

ベ き じょう

♪もしもし かめよー かめさんよ♪
イニシヤ イロミニ ムシイニヤ

呪文のような、意味の全くない語呂ですが、メロディに乗せて繰り返し返すと、勢いで覚えることができます。

唱えながら、スラスラと書けるようになれば完璧です。「2の冪乗」は様々な場面で活用できるでしょう。

0 乗 じょう	1 イ	$2^0 = 1$
1 乗 じょう	2 ニ	$2^1 = 1 \times 2 = 2$
2 乗 じょう	4 シ	$2^2 = 1 \times 2 \times 2 = 4$
3 乗 じょう	8 ヤ	$2^3 = 1 \times 2 \times 2 \times 2 = 8$
4 乗 じょう	16 イロ	$2^4 = 1 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2 = 16$
5 乗 じょう	32 ミニ	$2^5 = 1 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2 = 32$
6 乗 じょう	64 ムシ	$2^6 = 1 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2 = 64$
7 乗 じょう	128 イニヤ	$2^7 = 1 \times 2 = 128$
8 乗 じょう	256 ニツコロ	$2^8 = 1 \times 2 = 256$
9 乗 じょう	512 コイニ	$2^9 = 1 \times 2 = 512$
10 乗 じょう	1024 イレニシ	$2^{10} = 1 \times 2 = 1024$
11 乗 じょう	2048 ニレシヤ	$2^{11} = 1 \times 2 = 2048$
12 乗 じょう	4096 シワクロ	$2^{12} = 1 \times 2 = 4096$
13 乗 じょう	8192 ハイクニ	$2^{13} = 1 \times 2 = 8192$
14 乗 じょう	16384 イロミヤシ	$2^{14} = 1 \times 2 = 16384$
15 乗 じょう	32768 ミニナローヤ	$2^{15} = 1 \times 2 = 32768$
16 乗 じょう	65536 ムココサム	$2^{16} = 1 \times 2 = 65536$

国際単位

こくさいたんい

♪で〜んでん お〜しおし か〜たつおり〜♪
 ヨ〜トゼプト ア〜ットフェムト ピ〜コナノマイクロ

1/1 杼 じよ	10^{-24}	0.00 000 000 000 000 000 000 000 1	yocto ヨクト
1/10 垓 がい	10^{-21}	0.00 000 000 000 000 000 000 000 1	zepto ゼプト
1/100 京 けい	10^{-18}	0.00 000 000 000 000 000 000 1	atto アット
1/1000 兆 ちょう	10^{-15}	0.00 000 000 000 000 000 1	femto フェムト
1/1 兆 ちょう	10^{-12}	0.00 000 000 000 000 1	pico ピコ
1/10 億 おく	10^{-9}	0.00 000 000 000 1	nano ナノ
1/100 万 まん	10^{-6}	0.00 000 000 1	μ (micro) マイクロ
1/1000	10^{-3}	0.00 1	milli ミリ
1/100	10^{-2}	0.01	centi センチ
1/10	10^{-1}	0.1	deci デシ

	deca デカ	10	10^1	10倍 ばい
	hecto ヘクト	100	10^2	100倍 ばい
	kiro キロ	1,000	10^3	1000倍 ばい
	Mega メガ	1,000,000	10^6	100万倍 まんばい
	Giga ギガ	1,000,000,000	10^9	10億倍 おくばい
	Tera テラ	1,000,000,000,000	10^{12}	1兆倍 ちょうばい
	Peta ペタ	1,000,000,000,000,000	10^{15}	1000兆倍 ちょうばい
	Exa エクサ	1,000,000,000,000,000,000	10^{18}	100京倍 けいばい
	Zetta ゼッタ	1,000,000,000,000,000,000,000	10^{21}	10垓倍 がいばい
	Yotta ヨッタ	1,000,000,000,000,000,000,000,000	10^{24}	1杼倍 じよばい

10^{-1} 分
0.1 ぶ

10^{-2} 厘
0.01 りん

10^{-3} 毛
0.001 もう

10^{-4} 糸
0.0001 し

10^{-5} 忽
0.0000,1 こっ

10^{-6} 微
0.0000,01 び

10^{-7} 纖
0.0000,001 せん

10^{-8} 沙
0.0000,0001 しゃ

10^{-9} 塵
0.0000,0000,1 じん

10^{-10} 埃
0.0000,0000,01 あい

10^{-11} 渺
0.0000,0000,001 びょう

10^{-12} 漠
0.0000,0000,0001 ぼく

10^{-13} 糊
0.0000,0000,0000,1 もこ

10^{-14} 逡巡
0.0000,0000,0000,01 しゅんじゅん

10^{-15} 須臾
0.0000,0000,0000,001 しゅ じゅ

10^{-16} 瞬息
0.0000,0000,0000,0001 しゅんそく

10^{-17} 彈指
0.0000,0000,0000,0000,1 だん し

10^{-18} 刹那
0.0000,0000,0000,0000,01 せつ な

10^{-19} 六徳
0.0000,0000,0000,0000,001 りつとく

10^{-20} 虚空
0.0000,0000,0000,0000,0001 こくう

10^{-21} 清浄
0.0000,0000,0000,0000,0000,1 せいじょう

数の単位②

かず たん い

♪もしもしかめよ かめさんよ♪

分厘毛糸忽微纖

数の単位①

かず たん い

♪もしも かめよ かめさんよ♪
一十百千万億兆～

一 10^0
いち 1

十 10^1
じゅう 10

百 10^2
ひゃく 100

千 10^3
せん 1000

万 10^4
まん 1,0000

億 10^8
おく 1,0000,0000

兆 10^{12}
ちよう 1,0000,0000,0000

京 10^{16}
けい 1,0000,0000,0000,0000

垓 10^{20}
がい 1,0000,0000,0000,0000,0000

杼 10^{24}
じょ 1,0000,0000,0000,0000,0000,0000

穰 10^{28}
じよう 1,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000

溝 10^{32}
こう 1,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000

澗 10^{36}
かん 1,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000

正 10^{40}
せい 1,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000

載 10^{44}
たい 1,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000

極 10^{48}
ごく 1,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000

恒河沙 10^{52}
ごうがしゃ 1,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000

阿僧祇 10^{56}
あそうぎ 1,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000

那由他 10^{60}
なゆた 1,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000

不可思議 10^{64}
ふかしぎ 1,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000

無量大数 10^{68}
むりようたいすう 1,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000,0000

(参考) 数字と読み 一覧表
さんこう すうじ よ いちらんひょう

数字 <small>すうじ</small>	漢数字 <small>かんすうじ</small>	大字 <small>だいじ</small>	標準読み <small>ひょうじゆんよ</small>	漢音読み <small>かんおんよ</small>	訓読み <small>くんよ</small>
0	〇	零	れい	れい	まる
1	一	壱 壹	いち	いつ	ひと
2	二	弐 貳	に	じ	ふた
3	三	参 參	さん	さん	み
4	四	肆	よん, し	し	よ
5	五	伍	ご	ご	いつ、い
6	六	陸	ろく	りく	む
7	七	柒 漆	なな, しち	しつ	なな
8	八	捌	はち	はつ	や
9	九	玖	きゅう, く	きゅう	ここの
10	十	拾	じゅう	しゅう	とお、そ
20	廿 卅	弐拾	にじゅう	じゅう	はた
30	卅 卅	参拾	さんじゅう	そう	みそ
40	卌	肆拾	よんじゅう, しじゅう	しゅう	よそ
100	百	陌 佰	ひゃく	はく	もも、お、ほ
1000	千	阡 仟	せん	せん	ち
10000	万	萬	まん	ばん	よろず

日にち

ひ

一日
ついたち

二日
ふつ か

三日
みつ か

四日
よつ か

五日
いつ か

六日
むい か

七日
なの か

八日
よう か

九日
ここの か

十日
とお か

二十日
はつ か

三十日 (晦日)
みそ か

大晦日 (12月31日)
おおみそ か がつ にち

幾つ②

いく

一つ
ひと



二つ
ふた



三つ
みっ



四つ
よっ



五つ
いっ



六つ
むっ



七つ
なな



八つ
やっ



九つ
ここの



十
とお



幾つ①

いく

ひい	●
ふう	● ●
みい	● ● ●
よお	● ● ● ●
いつ	● ● ● ● ●
むう	● ● ● ● ● ●
なな	● ● ● ● ● ● ●
やあ	● ● ● ● ● ● ● ●
この	● ● ● ● ● ● ● ● ●
とお	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

※ 地域により、さまざまな言い回し があります。